

【vol.69】空気の読み方について ～その6～ インターバルを広くとったフレーズ

どうも、大沼です。

今回は、タイトルにもある様に『インターバルを(比較的)広くとる』といった観点から、フレーズを高度に聴かせる方法を学んでいきたいと思えます。

ここ数回の内容は、理論的にも、プレイ的にも、難易度が上がっている事を感じるかと思えます。

こなしていくのが少し大変かも知れませんが、この辺りをキチンと理解して身につけておくと、音楽的にしっかりしたモノが自然に出てくるようになりますので。

例えば、前回、前々回やったアウフタクトなどは、そういった要素に慣れてない人にソロを弾かせたりすると、強拍のオモテから始めるフレーズばかり弾いたりします。

それではどうしても単調なプレイになってしまいますし、音楽的な雰囲気コントロール出来なかったり、楽曲の前後関係や他パートとの自然な繋がりを演出できなかったりと、「幼稚な感じ」から中々抜け出せないんですね。

とは言え、高度寄りな技法は、身につけるのにも、それなりに時間が必要ですので、まずは知っておくだけでも知っておきましょう。

そうなれば、普段のリスニングの際にも、新しく気が付く事が増えていくので、それだけでも結構な勉強になります。

その上で、プレイの方は、いつも言っている事ですが、焦らずじっくりとマスターしていきましょう。

それでは、やっていきましょうか。

ではまず、そもそも『インターバルを広くとらない』場合はどういうものを指すのか？
と言うと、例えばスケールの構成音をそのまま順番に弾いていくような場合ですね。

譜例 1、Cメジャースケール(5弦ルート)

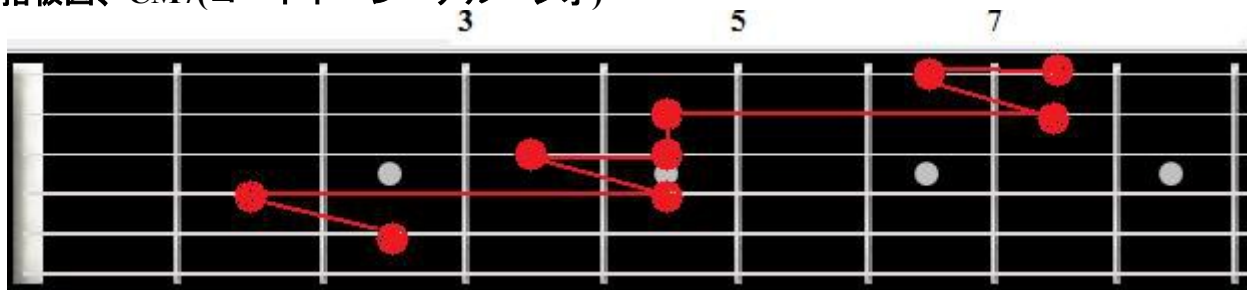


逆に、一定以上『インターバルを広くとった』フレーズとして、比較的馴染みがあるのは、コードトーン・アルペジオなどのプレイでしょう。

譜例2、CM7(コードトーン・アルペジオ)



指板図、CM7(コードトーン・アルペジオ)



上記の譜例で言えば、1よりも2の方が、フレーズ内の多くの部分でインターバルを広くとっていますね。

譜例2で言えば、フレーズ内の隣合った音同士の、最大のインターバルは長3度(M3rd)ですが、やろうと思えば、もっと広いインターバルを組み込む事も出来ますね。

こういった、『音と音が(比較的)離れている(=インターバルを広くとる)』フレーズを考える場合、『指板上の形』で捉えるのも1つの手ですが、根本的に、『五線譜の音符同士がどれ位離れているのか?』と言ったイメージが出来る事も大事です。

譜例3、広いインターバルの一例

CM7

mf

T
A
B

3 5 3 3 3

P5th M6th M7th oct(8th)

例えば上の譜例は、5度～8度の指板上の距離の一例ですが、タブ譜的な指板上の位置関係だけではなく、五線譜の赤矢印で示した距離の様なイメージも持っておきましょう。

ちなみに、音と音の距離が2度(m2ndもしくはM2nd)圏内で進む場合、『順次進行(じゅんじしんこう)』と言い、(※譜例1の様なメロディーライン)

音と音の距離が3度以上の間隔で進む場合、『跳躍進行(ちょうやくしんこう)』と言います。

譜例2で言うと、M7thから tonicに進む、短2度(m2nd)の部分は順次進行、その他の部分は長3度か短3度(M3rdかm3rd)の距離なので、跳躍進行ですね。

CM7

2 3 4

3 5 4 5 5 8 7 8

この譜例で言えば、赤枠の隣合った音同士が順次進行。その他は跳躍進行。

この、『跳躍』という言葉が指し示している通り、インターバルが広がると、ある音からある音へ、(上か下へ)一気に飛ぶ(距離が開く)わけですね。

これを利用して、フレーズを高度に聴かせよう、と言うのが今回の主旨です。

このインターバルを広くとる、と言う事をプレイ的な側面から見ると、ギターでは他の楽器よりも、物理的にはやりやすい傾向にある気がします。

(※それでも難易度は上がりますが)

例えば『オクターブを交互に弾く(鳴らす)』というフレーズがあった場合、管楽器や歌唱では、正確なピッチを保つのはかなり難しい様です。

譜例4、オクターブを交互に弾く



さて、『跳躍』という言葉が出てきましたが、今回の主旨である、「インターバルを広くとる(手法)」と言うのは、実質、『この「跳躍」した時の音列の印象をコントロールしよう(出来るようになるう)』、と言う事になりますね。

まずはいくつか譜例を見てみましょうか。

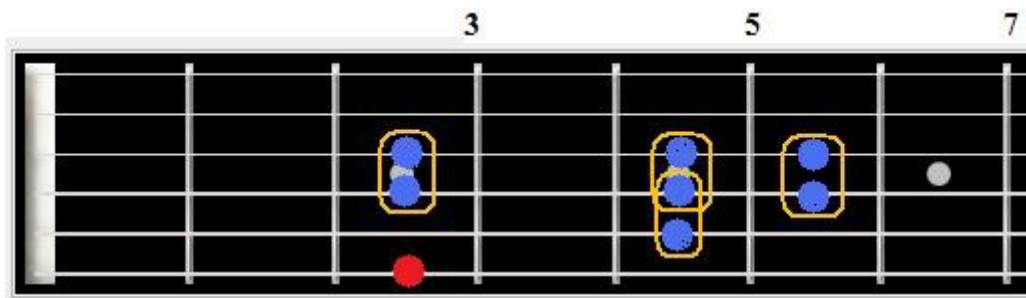
3度の間隔で意味がわかりやすいフレーズは、譜例2の様なコードトーン・アルペジオがありますので、次は4度間隔のフレーズです。

この4度音程を使ったフレーズとしてよく話に挙がるのは、ディープ・パープルのスモーク・オン・ザ・ウォーターのリフですね。

あのフレーズ(リフ)はバックのコード自体はGmなので、そのGmに対しての4度の音(C音)をずっと保っているわけでは無いですが、リフの動きの中で「基点にしている音」と、「その音から見て4度の音」を同時に鳴らしています。

ちょっと言葉ではわかりづらいかもしれないので、指板図を見てみましょう。

図、スモーク・オン・ザ・ウォーターのリフの指板上での動き



Gmのルート

青丸の低音弦の音から見て、
高音弦側(真下)の音が4度(P4th)

※ 2~3弦間はチューニングの関係で
P4thの位置が1フレット右にずれます。

例えばこのアイデアを拝借して、ロックっぽいリフを作ったりするとこんな感じです。

譜例 5、P4th のダブルストップのリフ

♩ = 160

S-Gt

Gm

mf

TAB

Gm

TAB

歪んだ音で、早めのテンポで弾いてみてください。(譜例では160位を想定しています)

今回は、4度の間隔にある2音を同時に鳴らしているフレーズにしましたが、ソロなどでは、(4度の関係にある)各音をバラバラに弾いたものを混ぜてもいいですね。

4度のインターバルは『無機質な響き』と表現される事が多いのですが、3度跳躍のフレーズなどと弾き比べてみると、調性感が薄れて聴こえます。

譜例 6、Cメジャースケール(3度跳躍&4度跳躍)

♩ = 60

CM7

S-Gt

mf

TAB

3-3 2 3 5 5 3 5-7-7 5 7 8 8 7 8 10-10 9 10 12-12 10

CM7

TAB

3-3 3 3 5 5 5 5-7-7 7 7 8 8 9 8 10 10

これはCメジャースケールの構成音で3度と4度の跳躍を体感する為のフレーズですが、

- ・前半2小節が、5弦の音に対して4弦の音が3度(M3rd or m3rd)の間隔
- ・後半2小節が、5弦の音に対して4弦の音が4度(P4th or #4th(aug4th))の間隔

になっています。

#4th(aug4th)というインターバルが出てきましたが、これはCメジャースケールの構成音内でそれぞれに対する4度を辿っていくと、自然と出てくるモノなので、今は深く考えなくても良いです。

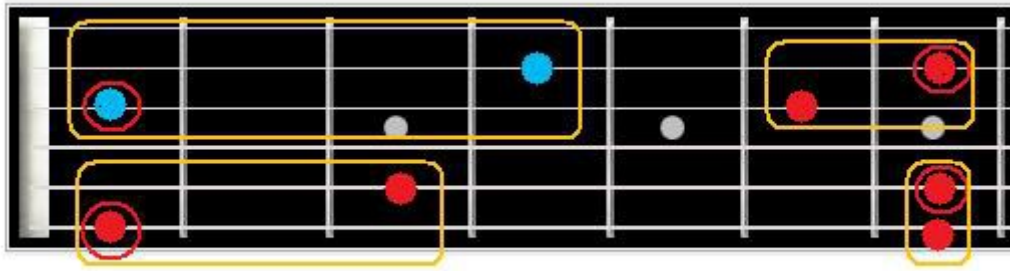
(※ちなみに5弦8フレットと4弦9フレットの部分が#4thの間隔です)

で、両者を聴き比べてみると、3度間隔のフレーズの方は、早い段階からCキーの調性を強く感じるのに対し、4度間隔のフレーズの方は、イマイチ基準が定まらない、少し宙ぶらりんな感じがする筈です。(※3小節目の途中くらいまでは特に)

こういった響きの特性もあり、『4度は無機質な響き』と言われるのでしょう。

では次に、5度の譜例を1つ例に出してみたいと思います。

まず5度(P5th)の指板上での位置関係は、僕らが慣れ親しんでいる、パワーコードのフォームで見るとわかりやすいですね。



赤の丸で囲んだ音を基準にすると、もう片方の位置の音がP5th

上の指板図の、右側の方の2音の位置関係は、先ほどの4度のものと同じですが、基準に見る音が逆になっています。

細かい解説は長くなるのでここでは割愛しますが、P4thとP5thはオモテとウラの様な関係になっているので、とりあえず現段階では、どちら側の音からも、もう片方の音のインターバルがわかるようにしておきましょう。

では譜例ですが、スティーヴ・ヴァイがたまに弾いている様な、5度間隔でどんどん音を進めていくフレーズを弾いてみましょう。

譜例7、スティーヴ・ヴァイ風、5度フレーズ

途中少し間隔を広げていますが、基本的なアイデアとしてはスタートの音から5度進み、さらに5度、5度・・・と続いていくフレーズですね。

(※このフレーズは、スケールとしてはCリディアンです)

5度の響きも4度と同じく『無機質な響き』と表現されますが、メジャーにもマイナーにも寄らない、中立的な響きを感じると思います。

次に6度の間隔ですが、ブルースやカントリーが好きな人は以下の様なフレーズを弾いた事があるかもしれませんね。

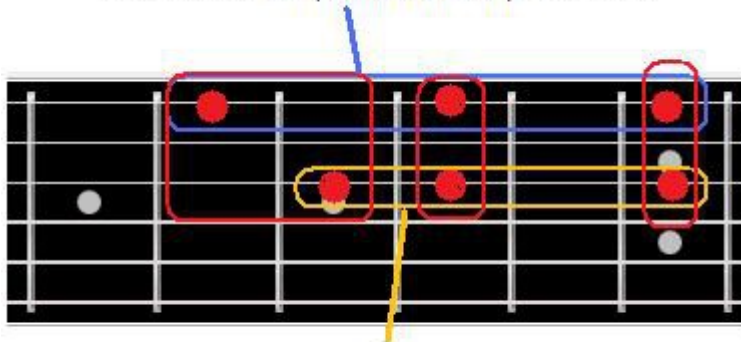
譜例 8、6 度音程の定番フレーズ

譜例 9、6 度音程の定番の動き、その 2

さて、この様な 6 度の間隔を見るときに、把握しておかなければいけないのは、どちらの音を基準に見るのか？という事です。

図、譜例 8 の場合

こちら側の音を基準にもう片方の音を見たら、
 むこうの音は 3 度 (M3rd or m3rd) にあたる音



こちら側の音を基準にもう片方の音を見たら、
 むこうの音は 6 度 (M6th or m6th) の位置

先ほどの 4 度と 5 度の位置関係でもそうですが、あるインターバルの関係にある 2 音の内、「どちらの音を基準にすると、もう片方の音はどのようなインターバルになるのか？」と言うのは非常に重要な話になってきます。

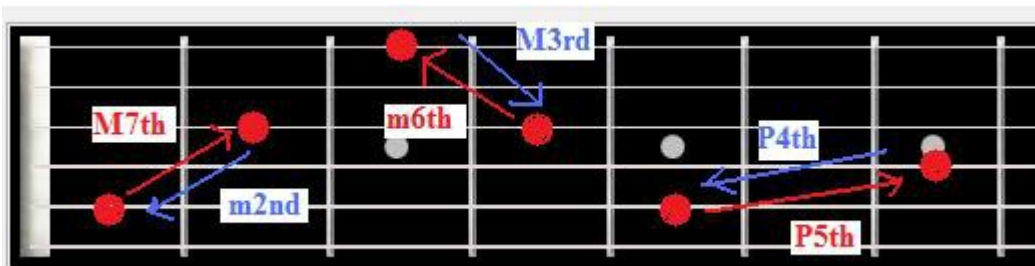
これは一見、考えるのが面倒な感じがしますが、意外と把握するのは簡単で、数字で言えば、『両インターバルの合計が9になる』と覚えておけばいいのです。

今の6度音程で言えば、片方から見たら6度ならば、もう片方から見たら3度です。

先ほどの4度と5度の関係も合計が9に、2度と7度も合計が9で対になっています。

もっと言えばM(メジャー)とm(マイナー)も対になっているので、M2ndとm7th、m2ndとM7th、M3rdとm6th、m3rdとM6th、と言うように、相方が逆になっています。(※でもP(パーフェクト=完全音程)の場合はどちらもP(パーフェクト)です)

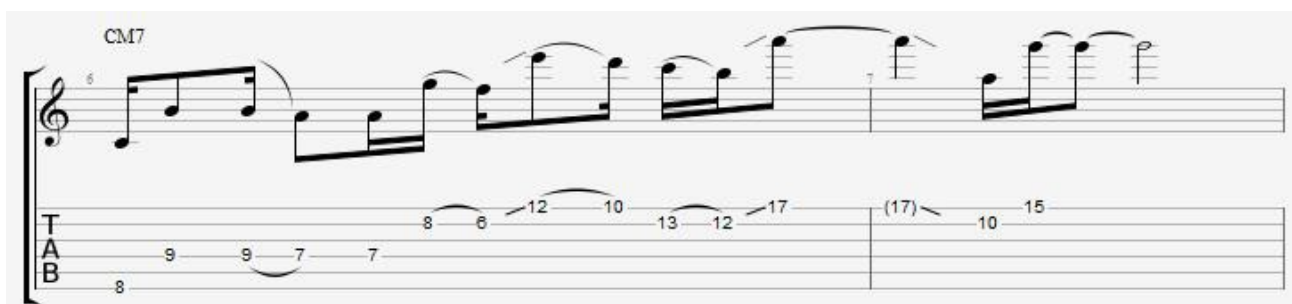
図、2音間のインターバルの相互関係(一例)



これは一例ですが、この様な見方も出来るようになっておきましょう。

では、4、5、6度と来て、後1つ残っている、7度音程のフレーズを見てみましょう。

譜例 10、7度を続けるフレーズ



さて、このフレーズは、Cメジャースケール内で、先に鳴っている音に対して、7度(M7th or m7th)に当たる音を、次に、次に、と続けていったフレーズです。

メロディーを単に上にずっと7度で上がっていくと、ギターの音域的にすぐに限界が来てしまうので、所々、後ろの(音名的に7度に当たる)音に下がっていますね。

これは厳密には、動きとしては『2度(M2nd or m2nd)で下がっている』と解釈するべきかもしれませんが、譜例として、指板上で長くフレーズを続ける為にあえてこうしました。

音名的には『C→B→A→G→F→E→D→C→B→A→G』と、ずっと各音の7度の音に向かっていきます。(Cメジャースケールの構成音内で、音程の上下問わず)

フレーズの響きとしては、かなり浮遊感の強い、難解な響きに聴こえるかと思います。(譜割も少し面倒なものにしてありますし)

さて、こんな感じで、各インターバルの雰囲気を経験してみました、いかがだったでしょうか？

それぞれに響きの特徴があり、ペンタやダイアトニックスケールの観点から普通に出てくるフレーズとは、大きく雰囲気が変わっていますね。

最後に、これまで『フレーズを高度に聴かせる手法』として学んできたモノを使った、まとめフレーズ(ソロ)を弾いてみましょう。

コード進行は毎度おなじみのkey=C時の1-6-2-5です。想定テンポは80ですが、結構、難しめのフレーズにしてある(と言うか自然と難しくなる)ので、50~60などの遅めのテンポから練習を始める事をお勧めします。

使っている音はCメジャースケールの構成音に(ほぼ)収まっていますが、コードトーン・アルペジオだったり、シンコペーションやテンションなども多めに入れているので、普通にスケールのソロを弾く場合とは、雰囲気をかなり変えています。

譜例 11、これまでのまとめ (key=C、CM7-Am7-Dm7-G7)

The image displays four systems of guitar notation. Each system consists of a musical staff with a treble clef and a corresponding TAB staff. The first system includes chords CM7 and Am7. The second system includes Dm7 and G7. The third system includes CM7 and Am7. The fourth system includes Dm7 and G7. The notation includes various rhythmic patterns, triplets, and slurs, with the TAB staff providing fret numbers and fingerings for each note.

いつもの事ですが、バックングがあると各フレーズの雰囲気を感じられると思うので、出来る限りその上で練習してください。

指使いなども、フレーズの構成上、ある程度は決まってくると思いますが、基本的には、自分なりに弾きやすいように変えてもらって構いません。

さて、長らく『空気の読み方について』というテーマで、高度寄りなプレイの技法を解説して気でしたが、それも今回で終わりになります。

なんだかんだ言って、ここ数回のテキストだけで、かなりの情報量になっているはずです。

やはり、いきなり全部をマスターするのは大変だと思うので、練習の際は、どの技法を使っていくのか？、1つか2つくらいにテーマを絞ってやるのが良いですね。

以前も言いましたが、過去のテキストの譜例も、最近学んでいた技法を所々で使っていたりするので、もう一度読み返してみると、きっと新しい発見があるはずです。
(※後は今までコピーした曲とかを振り返ってみても良いですね)

では、次回からは『メロディックマイナースケール』に入っていきたいと思います。

以前学んだナチュラルマイナースケール、ハーモニックマイナースケールとも比較しますので、余裕があったら復習しておいてくださいね。

それでは、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼